変わる日本の「暮らし」と「まち」

災害からいのちを守り抜く 安心で利便性の高いまちへの再生

宮城県気仙沼市 南気仙沼地区被災市街地復興土地区画整理事業
（2012年●平成24年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

2011年3月11日14時46分ごろ。宮城三菱自動車販売の千田満穂（ほ）会長は、当時、気仙沼市本郷にあった本社で勤務中、かつて経験したことのない揺れを感じた。

「ほんとうに地面が割れてしまうんじゃないかと思いました。歩こうにも床が上下して足が地面につかないんですよ。これは大変なことになったと思いましたね」

すぐに社員を帰してふと外を見ると、会社前の道路が川と化し、車体の前半分が水に沈んで傾いた車が次々と流されてくる光景を目にした。

「海から4キロも離れているのに、事務所の中まで、水浸しになりました。電気も通信も途絶え、真っ暗な闇の中で水に浸った車のヘッドライトだけが点滅し、鳴り響くクラクションが『助けて』と叫んでいるようでした」

それから10年、83歳を迎えてますます精力的に仕事をこなす千田会長。現在は、自らが願う気仙沼の未来を描いた「夢のイラストマップ」を作成することを生きがいの一つにしている。そこには、気仙沼地方の伝統的な凧「天旗（てんばた）」がたなびく海辺や瀟洒なヨットハーバー、安全で暮らしやすいまちの姿が克明に描かれている。

「勝手な夢ですが、これからも夢に見る素敵なまちになるよう、がんばっていきたいですね」

商業施設が建ち道路が整備された南気仙沼。

まちの拠点を復興再生

遠洋マグロ船基地やフカヒレをはじめとする水産加工品生産などで知られる気仙沼市。東日本大震災では、津波と火災、地盤沈下などで甚大な被害を受けた。

震災後、このまちを訪れるたびに、嵩上げでむき出しだった地面に災害公営住宅が建ち、新たな道が通り、橋が架かり……その変貌ぶりには目を見張るばかりだ。

復興の陣頭指揮を執ってきた菅原茂気仙沼市長に話を伺った。

「復興事業の大きなテーマは、住宅の再建と産業の再生でした。住宅においては安全と利便性の確保を掲げ、避難道にもなる基幹道路整備にも注力しました。どれも災害復旧のみならず、防災や利便性などの社会課題も同時に解決できるよう考えてきました」

復興に向けて、大きく立ちはだかったのが、気仙沼市の地形だ。もとより平らな土地が少ないうえ、そのままでは津波の被害を受ける恐れもある。しかも、平均60～70センチ地盤沈下しており、満潮時は水浸しになる状態だった。

津波から守られる新しい土地、そしてまちをつくる。その解決策となったのが、土地区画整理事業だ。なかでも、水産関連施設が集まり、住宅や店舗なども多い市の拠点である南気仙沼地区、鹿折地区の土地区画整理事業を担ったのがUR都市機構だ。UR気仙沼復興支援事務所長の佐光清伸が話す。

「南気仙沼地区は、周辺の沿岸部に水産関連施設が密集する市の産業経済の中心地です。地区内には壊滅的な被害を受けていない場所もあり、かつてのまちの一部を残しながら、嵩上げによる現地復興型のまちづくりをしなければいけない。高台移転のように一気に工事を進めるのとは違う難しさがありました」

地中には電気や上下水道など数多くのライフラインが通り、生活や水産業のために道路は常に通れるようにしておかなければいけない。何度もライフラインや道路を切り替えながら、南気仙沼地区は海抜2・2～5・5メートルへ嵩上げ。地権者と細かく話し合いながら、海辺に商工業系、奥に住宅を配置していった。

並行して、URは2017年までに気仙沼市の5地区、1033戸の災害公営住宅整備も支援。さらには、土地活用を希望する地権者と進出を望む事業者の「仲人」となり、マッチングを行う「事業者等エントリー制度」も考案し、スーパーやコンビニの開業につなげてきた。土地区画整理事業は、2019年に鹿折地区、2020年に南気仙沼地区が完了。安全で利便性の高いまちづくりに尽力してきたURの事業は、今年度ですべて終わりを迎える。

事業終了にあたり、佐光は「達成感もありますが、当たり前のことをした気持ちです。我々がつくったのは、あくまでもまちのベース。気仙沼は得意技を多く持つ、ポテンシャルの非常に高いまちだけに、これからが楽しみです」と話す。

URとともに復興に携わった気仙沼市建設部の佐々木守部長は「この10年一緒にやってきたURさんは、私にとっては戦友です。公共交通も通って、魚市場や水産加工場など働く場もある、すごく利便性の高いまちになった。これからが踏ん張りどころだと思っています」と、感慨深げに語る。

菅原市長は「極めて複雑なパズルのような工事だったと思います。市の力では到底難しい工事で、URさんのこれまでの実績と経験によって合理性を持った事業として進めていただきました」と、その労をねぎらう。

未来を担う人材を育成

「ハード面でのまちの形は、大きく前進することができた」と菅原市長が胸を張る気仙沼市。ソフト面でのまちづくりでも大きく前進しつつある。気仙沼市震災復興・企画部の小野寺憲一部長が語る。

「若手経営者をはじめ、高校生や女性、シニアのための人材育成プログラムを行い、市民が主役のまちづくりを目指しています。その結果は、市への移住者や就職希望者の増加、また市政への参加意欲の高まりとなって表れています」

この春には、全長1344メートルの「気仙沼湾横断橋」を含む三陸沿岸道路の気仙沼港と唐桑半島を結ぶ区間が開通。今春の連続テレビ小説「おかえりモネ」の舞台になるなど、明るい話題も続々。10年の節目を迎え、気仙沼市の未来へ向けての日々が始まっている。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社